

主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた

学院長 嶋田 順好

学生の皆さんにクリスマスということで最初に思い浮かべる幼い頃の思い出を書いて下さいとお願いすると、「サンタクロースからプレゼントをもらおう日」と答える人が圧倒的に多かったことでした。つまり世界中で祝われるクリスマスは、実際のところはクリスマスではなく、サンタクロースマスとなっているのが現実ではないでしょうか。

クリスマスとは一体何なのでしょう。クリスマスについて色々な事が言えると思います。しかし、使徒パウロは一言でこう告げました。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」(コリントⅡ8:8)と。

ここでパウロは主イエスが「豊かであった」ということを語ります。この豊かさとは一体どんなことを指しているのでしょうか。それこそ金持ちで豪邸に住んで、左団扇で暮らしていたというような豊かさを意味してないことは誰にでも察しがつくことです。しかし、それならばここでいう主の豊かさとは何でしょうか。それは一体どういう事柄を指しているのでしょうか。主の豊かさ、それは主イエスご自身が神の御子であり、神そのものであったということにほかなりません。にもかかわらず、その方が「あなたがたのために」すなわち私たちのために「貧しくなられた」ということを指しているのです。

更に問えば、神の御子であり、神そのものである方が、わたしたちのために貧しくなるとはどのような事態を指すのでしょうか。そのことで私たちがすぐに思い浮かべることは、最初のクリスマスの晩、主イエスはこの世のほんの一握りの人、すなわちベツレヘムの荒野にいた羊飼いたちや東方の占星術の学者たち以外からは省みられる事なく、家畜小屋の飼葉桶の中にお生まれになったということでしょう。主イエスは、神殿や王宮で生まれたのでもなければ、豪邸で生まれたのでもありません。家畜小屋で生まれたのです。確かにこのことの中に、私たちのために貧しくなられた方の「しるし」(ルカ2:12)を見ることができるでしょう。しかし、この方の貧しさをそのような面においてのみ捉えるのであれば私たちは木を見て、森を見ないことになるのではないのでしょうか。

語弊を恐れず言えば、ある意味、主イエスが家畜小屋で生まれたか、宮殿で生まれたかという事柄は、問題ではありません。決定的に驚くべきこと、それは神である方が、私たちのために人となられたという事実です。それこそが真に驚くべき貧しさなのです。そのことを弁えた上で、なおかつその方が、家畜小屋で生まれたことを驚くのです。しかもその驚きは、ついにその方が、「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順」(フィリピ2:8)であられたということで頂点に達します。それは私たち死すべき者の罪を贖うためになされた神の御子の御業でした。そのことが、ただそのことだけがここで言われる貧しさの内容です。

私たちが普通一般に「豊かであったのに貧しくなられた」ということで考え得ること、それはせいぜい全財産を貧しい人々に分け与えて出家するという程度のことではないのでしょうか。事実、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』の著者として知られるロシアの文豪トルストイは、晩年になってそのような歩みをしたことでした。そのこと自体も並大抵のことではある業ではありません。しかし、主イエスは、ただ愛の故に神であるにもかかわらず人となり、ただ愛の故に家畜小屋に生まれ、ただ愛のゆえに惜しみなく十字架にご自身の命を捧げ、一切を与え尽くされた救い主なのです。

「それは主の貧しさによってあなたがたが豊かになるためだった」とパウロは語ります。ただ私たちが豊かになるため、主イエスは貧しくなられたのです。そうであれば、ここで言われる豊かさとは、私たちが金持ちとなって、何の苦労もない人生を歩めるようになるということではないことがお分かりいただけるでしょう。まことの豊かさ、それはどんなにこの世の金持ちになっても決して手に入れることができない罪と死と滅びから救われ、永遠の命の約束のもとに生き得る者にしていただけるということです。それこそがクリスマスの出来事が私たちに指し示す、本当の豊かさの中身です。